

## 『寸錦雜綴』考

— 非森島中良作であることを中心に —

石 上 敏

一 近世後期に叢生した考証隨筆のひとつである『寸錦雜綴』は、

隨筆文學選集の第五卷（書齋社、昭和2年5月刊）、日本隨筆大成第一期第四卷（吉川弘文館・日本隨筆大成刊行会、昭和2年7月刊）、日本隨筆全集の第一巻劈頭（国民図書、昭和2年8月刊）と、はからずも同じ年に相次いで刊された江戸隨筆集成三種に収められることで、その大胆なレイアウトと資料的価値の高さにおいて人口に膾炙することとなった。役者請状をはじめとする遊里・演劇関係の資料のほかに、横綱免許状など、全二十九項目のうち繰り返し引用・紹介されて来たものは少なくない。ただ、年記・奥付等、出版の経緯を語る徴証の一切を欠いたことで、この書の成立の背景は長く詳らかでなかった。本書に収められた諸資料のうち、年代的な下限は谷風槐之進の手形であり、その解説文中に「寛政七乙卯正月九日齡四十六歳にして黄泉におもむく」云々と記されている所から、成立は寛政七年の谷風没後、おそらく

く文化初年頃と漠然と推定される程度にすぎなかった。<sup>1)</sup>

## 二

ところが、日本隨筆大成新版二期八（昭和49年5月刊）の付録で、今田洋三氏は『類集撰要 卷之四十六（国立国会図書館所蔵旧幕引継書）中の記事によって、『寸錦雜綴』が版行差止になった事実を指摘された。その文章が「森島中良の筆稿」と題されたのは、『寸錦雜綴』の編者が森島中良であるとの通説に従われたからである（この点については後述）。ともあれ、今田氏の指摘によって、同時にこの書の成立が寛政十年頃であることも明らかになった。以下に、その一条を引用してみたい。<sup>2)</sup>

同年（引用者注・寛政十年）三月板行相止

## 一 寸錦雜綴

右之書板行寛弘度段仲ヶ間内々願出候処行事難及了簡候二付奈良屋御役所へ御伺申上候処難被及御沙汰旨被仰渡候この記事には欠ける版行差止の理由を今田氏は「出版取締り令

に抵触しそうな箇所が五か所にわたって墨で消されている。」という言い方で、記載内容によるとの見方を示された。しかし、筆者は、造本自体の奢侈が出版取締令に触れたのではないかと考える。縦約三〇センチ・横約二〇センチという特大の版面を贅沢に使って（本書の主眼である実物大もしくはそれに近い図版の中には、一丁半に渡るもの五例、二丁に及ぶものも二例ある）、主に遊芸や悪所に関わる品々を満載した内容は、寛政十年という時点では奢侈に過ぎたものではなかったか。以下に簡単な説明を付して、「目録（目次）」に沿ってその内容を概観してみたい。

勅進能番組（享保年間のもの）

變童券（安永六年二月十六日付江戸座新七宛陰間請状）

東都地図（推定寛永年間刊）

横綱免許（寛政元年十二月十九日付、谷風宛吉田追風判）

元禄曆（元禄十五年十二月、赤穂浪士討入りの月）

谷風手印（手形。嗜伝を付す）

落語（享保十五年刊、伝来した象に関する落とし唄）

揚屋請帖（揚屋が妓楼に大夫を借り出すときの証文）

俳優交承（元禄十三年山村座役者付）

娼妓封伝（遊女の外出許可証。本編では、次の「大門公駿」

と一緒に載る）

大門公駿（同前。ただし前項の紙製に対して木製）

高尾緋印（三浦屋高尾の封印。「かよふ神」とあり）

寛永稗史子（猿蟹合戦。付記に「宝永のむかし」とする）

常磐津宗図（浄瑠璃師範）とあり。免許皆伝の証書）

漱石香報条（平賀源内作、明和六年版。引札に戯言を交えた

権輿とする）

遊行女画蝶（鳥居清信画、元禄十三年刊の画本の初丁薄雲・

高尾と奥付）

舞妓院本（元禄頃の舞子師匠志賀山万作の稽古本）

戯子券（元禄十六年十一月付、生島小平次より勘三郎宛の手

形。付記に、小平次は生島新五郎の弟子か、とす

る）

和考写真（勝川春章画、道化形名人初代風音八肖像）

排戯画帖（享保四年市村座顔見世絵本）

杜国駒図（養虫庵蔵、松尾芭蕉筆の「軒の図」）

小女百人一首（明和六年版「新版風流娘百人一首」、遊女・

茶屋女の三十六歌仙見立て）

衣手冊子（享保十三年、玉菊一周忌の灯籠会に際する十寸見

蘭州作の浄瑠璃「水てうし」）

意休怠状（寛文三年四月十五日付、意休（深見重左衛門、号

自休）の謝り証文）

高尾上蓋衣（高尾の鳳凰染めの衣装とその雛形）

紀文剣経（紀伊国屋文左衛門の脇差の鞘）

堀部氏并（四十七士堀部弥兵衛の并、細井広沢の銘「堀部弥

兵衛遺物)

可漏麴器 (一名大名倭食、蒔絵入り蕎麦箱)

翁瓢米櫃 (代々の市川團十郎所蔵、松尾芭蕉の米瓢箪)

以上である (目録二十九項目、本編二十八項目)。

実際に、今田氏が「墨で消され」と言われる部分について、「寸錦雜綴」の例を検討して見ると、

① 享保□□ (二字分。年次であろう) 大江殿の北すちかい橋のほとりにはあして勸進能興業せられしときの番組となむ (勸進能番組) 付記。 (項目名は目録に従う。以下同じ)

② 一、□□□□ (約四字分。人名と思われる) 御法度々宗門二而

…… (嬰童券)

③ 此地図は予大人□□□□ (四〜五字分) 文庫なりしをせちにこひてうつす。 (東都地図) 付記。 人名か)

④ 常磐津文字□□ (一〜二字分) といふ妓女のもとよりかりてうつす。 (常磐津宗図) 付記。 太夫名の一部であろう)

⑤ 此比図蔵柏延ト確執ニオヨンデ□ (一字分) 紋ノ三マヌヲ消ココロニヤ一文字ヲ点ス (俳戯画帖) 付記。 紋であろう)

⑥ □□□□ (約四字分) 江可被伝上処ニ何メを頼様二…… (意休意状)。 人名と思われる)

の六箇所であり、そのまま刷られた他の部分と比較しても、当局への憚りとは考えにくい (これらは後述する後刷でもそのまま残される)。 何より六例のうち四例までが付記の一部であり、その

気になれば訂正は容易であるといえる。 おそらく、所蔵者への遠慮 (③④) や被記載者への配慮 (②⑥)、事実確認の不全あるいは見落とし (①⑤) の類と考えて誤るまい。 特に個人のプライバシーに関わる文書中の人名であると思われる②⑥は、公刊の書としては当然の処置であること、現在と変わらない。 これらの他、

「東都地図」の図中にも同様の例が二箇所あるが、やはり入木ではなく彫り残し、あるいは原本時点で既に存した彫り残しであると思われる。 このように、彫り残された部分には、それぞれに理由が見いだされ、それらは出版差し止めによって急遽抹消されたようなものではなかった。 そもそも、これらの部分を抹消して版行許可が下りたのであれば、奥付等を備えた本が現存してよいはずである。

三

ところで、この書の作者 (編者) については、従来、序文を記した森島中良を擬することがしばしばであった。 しかし、「近代名家著述目録」 (文化八年序) や「西洋学家訳述目録」 (嘉永五年刊) をはじめとする著述目録の類、あるいは中良略伝の類、また中良について記した書き留め・随筆の類にも、「寸錦雜綴」を彼の著作としたものは一切見当たらないのである。 その点、日本随筆大成新版一期七 (昭和50・?) の付録 (「寸錦雜綴」抄) で、今尾哲也氏が「不幸にして『寸錦雜綴』の著者は明らかでない。

(中略) 序文の口吻から、その序を書いた森羅亭主人(風来亭主人)こそ著者ではないかともいわれている。そうだとしたら、著者は、平賀源内に学んだ蘭学者森島甫斎(桂川甫筵)だということになるのだが……。」と、記された通りなのである。

『寸錦雜綴』の編者が森島中良であろうとは、はやくから推測されて来たことであつたが、それを明記するようになったのは、比較的近年の傾向である。先にも触れた丸山季夫氏解題、あるいは今田洋三氏の報告以来、『日本古典文学大辞典』の「寸錦雜綴」の項(長尾高明氏執筆)のように、中良をこの書の編者に擬することの背景には、今尾氏の言われる「序文の口吻」(後述)や、丸山氏が触れられた、所掲の「漱石香」が中良の師平賀源内のものであることのほかにも、これだけの資料を集めることの出来る者は自ずから限られて来、その点、十八大通の一人に数えられもする、奥医師桂川家の森島中良は適任者であるという予断が存在したことは間違いない。

しかし、森羅亭主人(中良)の序文、独吟子緑青人の跋文を成心なく読むならば、編者は後者であつて、中良は序文を依頼されたに過ぎないことは明白である。些か長くなるが、以下に序文・跋文の全文を引用してみたい。

数百の狐の腋を綴りて 發とす。其価千金なり。以て寒を坊ぐべし。帛屑を集て 櫛衾を作る。其銭数百に足ざれども寒を凌ぐこと。白狐の裘におとらざるべし。いはずと知し御

事なれども。能々出来て役にたゝぬものあり。わるくてやくに立ものあり。棘の猿玉の木葉は。細工が能ても屈にもならず。四文の耳搔三文の筆は。不細工なれども調法なり。琢磨に巧みをつくしける夜光の珠の冷なるは。番太良が手細工の。有明炭団の暖なるは若す。上水も掘抜の新工夫に。高升の鼻をひしがれ。竜吐水も竹筒の水。玩に。我慢の角を折ぬべし。加賀落雁の奇麗なる。小倉野の見付のわるき。風味にとりては。同日の談にあらず。上方役者のこせつきたる。小刀細工の寝ふたきより江戸風の荒事の無造作なるこそ目覚業なれ。されば書を編する事此理に等し。頭をくだき函を浮せ。夜の眼も寝ずに考へてもやんやといはざる新作あり。こゝろもとめぬ書拾物に。おもひの外あたりにあり。素より此書の如きは。撰ぶに骨もをらざるかはり。面白くもへんてつものなし。風雅でもなく洒落でなく。手鑑でなく画譜でなく。何ともつかぬものなれども。下世話を知せ給はざる君たちに見せまいらせなば。羊羹饅頭より甘薯や南瓜のわる落を。可笑と思す事もありぬべしと。讀るはまことの坐形なり。予に外題を乞。取あへず指子と名づく。其こゝろはと問ふ。答へて曰。ハチいけない物を綴り合せたはさといへば。作者あるへ声に成て腹を立。わしが切角骨を折たものを。其様にこなさつしやるなといふ。成ほど是も最なり燕石を玉として十襲珍藏したる如く。この作者の心には。

あつぱれ錦を綴りたる心意氣にて。一部自慢の顔色なれば。  
則ち寸錦縫綴とやらかしければ。きやつ満悦のやうすなり。  
後來この書を規範として。新編をあらはす馬鹿ものあらば。  
昏屑屋の内に達者あらむと云爾。

東都狂生

森羅亭主人 圖(己象)

和漢の風流今に尽ることなく。庵を結んで疏飯を食ひ。四方  
の流れの水を飲ては。つれづれの余りに眩を曲て枕とし。

終夜瓦燈をかゝけて筆を採れば。きりくすのつゞり合す  
一卷とはなりぬ。もとより東ふりの作者。燈台もと明るし

と。涙の真砂の一つふ撰して。拾集めたるなめり。御礼は  
細工は流く料理は包丁。献立の工をあらはさんとするもむ

へなるかな。しかし種とすへき一物もなければ。鶏卵と等し  
く。清るは昇るすまし吸物。うしほの鯛の眼より。月雪花

の三ッ道具をもて。風味の中の骨となし。濁は下りて濃汁  
の羹に。飛竜のおぼ子を用る時は。豈琴高も恐さらんや。

吸口の匂はせふりに書ちらす。折しも物淋しさに香物となる  
味鴨、の二有取出し。こなからの酒をもとめて。盃を傾けは

ろく酔にまかせ。耳を取て鼻をかみ。咳私をして

独吟子 緑青人 誌

如何であるうか。両者ともに戯文であつて、とくに料理尽くし

の狂文である後者には些か意味を取りにくい部分があるけれども、  
双方ともに、作者(編者)が「独吟子緑青人」である(森羅亭主  
人ではない)ことを示しているという点では一致している。確か  
に、中良の緑青人に対する口調は、いかにも無遠慮かつ馴れ馴れ  
しいが、それも戯文にはよくあることで、両者が親しい間柄にあ  
ればこそ序文の執筆を依頼したのであらう。

跋者「独吟子緑青人」の正体が從來不明であつたことは、中良  
編者説を助長するところがあつたのだらうし、「独吟子」という  
号は、自作自演を思わせもするのであるが、しかし、中良周辺の  
実在人物として、「緑青人」が存在するとなれば、話はまた別だ  
らう。文化十年八月刊の「狂歌あきののら」は、合歡堂序、竹川  
藤兵衛・愛智屋善兵衛の江戸二肆の合板に成る四方側の狂歌集で  
ある。四方側の頭領、四方歌垣真願は、天明初年に森島中良(狂  
名竹杖為鞋)に入門し、狂歌師としての長い道を歩み始めた経緯  
があり、その交友は長く続いた。ところで、この集の本文一丁  
表・三丁表・五丁表・六丁裏・七丁裏の五箇所に「緑青人」の狂  
歌が載る。

その緑青人の正体については、相見香雨氏編の「酒井仲遺稿抄」(日本美術協会報告五十四号、観文楼叢刊第八、昭和14年12  
月)に示唆的な一文が見える。この「遺稿抄」には、二箇所に中  
良も登場し、酒井仲(上州伊勢崎藩主酒井忠温の三男。従兄の酒  
井抱一より尻焼猿人の狂名を譲られる)の交友圈に、中良・緑青

人ともに属していたことがわかる。以下に「緑青人」の登場する一条を引用してみよう。

梅やしきの花みんと大屋裏住緑青人秀朝（割注、俳諧師秀國の子野呂松造ひにて名亀太といふ）などに誘れ亀井戸巴屋といへる茶店に酒たうべて

（歌あるいは句は欠）<sup>（註）</sup>

萩の屋翁は萩寺へ緑の青人は松の隠居へ亀太はかめ井戸へ猿人は秋葉ならんとおの／＼その名に縁あるもおかしまた梅やしきは

此はなも一樹の陰や臥竜梅

すなわち「緑の青人」との表記から、「緑青人」とは、「みどりのあおひと」とよむ当代の狂歌師であつた。<sup>（註）</sup>

大屋裏住は、天明期以来、腹唐秋人とともに本町連の中心をなした著名な狂歌師であるが、緑青人との関係についてははっきりしない。この他にも「遺稿抄」には、「よし原小松屋の夷講に裏住野呂松狂言に誘れて」という詞書や「大屋裏住かみちのくへゆきける時異見に歌よみて遣しける／十府のあまをみそめて腰をぬかすなよ三ふる寝るとも七ふくりぞや」という狂歌が載り、酒井仲と大屋裏住との交際が繁かつたこと、その場に秀朝（亀太）や緑青人が加わっていたらしいことが知られる。このような交友の場から考えて、おそらく緑青人もまた相当の通人だったのに違いない。そうであつてはじめて、「寸錦雜綴」に見られる梨園

や遊里関係への関心の深さと希少な古資料の収集が可能であつたことが頷ける。以下しばらく「遺稿抄」に名前を挙げられた人々を通覧してみよう。

芝連の狂歌師達にはじまり、澤村曙山（役者、二代目田之助）・感和亭鬼武（戯作者）・遊女篠原（鶴屋）・交賀明（俳人）・清水天民（画人）・市川男女蔵（役者、三代目門之助）・山田校校（琴山田流祖）・稲垣如蘭（江州山上藩主、焼絵師）・堀保己一（国学者）・狩野永徳（画人）・酒井是三（茶人）・三島自寛（国学者）・竹子清蔵（細工人）・大窪天民（儒者）・籬島秋里（学者）・扇屋墨河（吉原妓楼主・狂歌師）・遊女滝川（大文字屋）・加保茶元成（吉原妓楼主・狂歌師）・山道高彦（狂歌師）・遊女月岡（兵庫屋）・遊女雛鶴（鶏舌楼）・坂東是業（役者、三代目三津五郎）・大童山（若年力士）・新開荒次郎（力士）・石川宗叔（落語家）・式守伊太夫（行司）・遊女花扇（五明楼）・狩野永川（画家）・備前一心斎（岡山藩主池田治政）・志賀与市（姫路藩士）・富本豊前太夫（富本節太夫）・雲州公（出雲藩主松平不昧）・郡山藩主・雪川公（不昧弟、茶人・俳人）・福知山侯（朽木昌綱、茶人・古銭家）・増山雪斎（伊勢長島藩主、画人）・清河太平次（唐通詞）・杉田伯元（医家、玄白の息）・細田栄之（浮世絵師）・窪俊満（浮世絵師・戯作者）・水野此卿（茶人）・小那屋小十郎（包丁人）・姫路侯（酒井雅楽守忠以、茶人）・戯言坊（西遊寺上人・狂歌師）・歌川豊

奉・豊国・国政（浮世絵師）・小野川喜三郎（力士）・十寸見蘭  
爾（三代目蘭州、河東節）等々。

今、煩を厭わずに、「酒井仲遺稿抄」に見える主な人名を列挙したのは、先に一覧した「寸錦維綴」の内容と、ここに示される酒井仲の交友圈、その交友の内実とが重なり合うことを示すためでもある。

編者の交友に関して、「寸錦維綴」から知られるところは、「同盟松隣子」というのが、俳書「木公集」（文化十一年刊）や「われとわれ」（同十三年刊）を編んだ俳諧師松隣北斎のことであろうと推定される程度であり、「緑青人」の正体はそれ以上には知られないのであるが、この「遺稿抄」には、別の部分に「寸錦維綴」の成立を知る上で見過ごせぬ記事が見える。

田村鴉居（割注、俗名茂兵衛稲垣公の長臣）予か所蔵せし三浦や高尾か衣裳（割注、何代目の高尾か不詳額ケツ也寸錦維綴と云冊子に出）をひたすら所望せられし故田村か亭に茶番狂言興業の時先しばらく借しまいらせんとて奥に

これを着て君か茶番をするならばたか尾か生んだ高といふべしそれなりに引揚巻の助六は同じ三浦の衣裳なれども

（傍点は引用者）

ここから、「寸錦維綴」に載せられた三浦屋高尾の衣裳は編者緑青人のものではなく、酒井仲のものであったことが分かる。ちなみに仲が、差し止めに遭った「寸錦維綴」への言及に躊躇しな

いのは、この「遺稿抄」が私的性格の強いものだったからであろうし、言及が至って客観的なのは、「寸錦維綴」の出版にこの人物がさほど関与していなかったことと、貴人らしい鷹揚さを示すもののようである。

「遺稿抄」は、相見香雨氏による解題「酒井仲と其遺稿に就いて」によれば改装の折りに錯簡が生じた如くであるが、出現する年記によつて「寛政の末頃から文化の始頃に至る間のもの」（同前）と推定されてもいる。右に引いた部分は、「寸錦維綴」成立以後のものであることに間違いないのであるが、それ以前に高尾の衣裳が緑青人の所蔵であった可能性は低い。つまり、当初から酒井仲の所蔵品であったものを緑青人が借り受けて、「寸錦維綴」に載せたものと考えてほぼ間違いない。ということは、これ以外にも編者以外の所蔵品が含まれている可能性が高いことを示唆する。「寸錦維綴」に収められた品々の希少さと資料的価値の高さは先に触れた通りである。従来、「寸錦維綴」に収められた品々のすべてが編者の所蔵品であるという前提で、編者の推定が行われて来たように思われるが、そのような前提から解放されることで、編者の条件はかなり緩いものとなるだろう。編者であると思われる緑青人は、「寸錦維綴」所蔵の品々のうち、どれ程かは酒井仲をはじめとする通人たちの所蔵品を借り、それを集成したのがこの書だったのである。

いずれにせよ「寸錦維綴」は、右に見たような寛政改革頓挫後

(寛政五年に定信體免)のサロンのな雰囲気の中から出現して来た、現存本による限り色刷り本は存在しないが、その点を除き徹頭徹尾趣味的で豪華な書であった。その雰囲気もまた「遺稿抄」に色濃く現れており(聚縮政策にあえて反抗した池田治政は、その象徴的存在といえよう)、「墨や平蔵(割注略)か(が)許よりかれが所持の漢時代の古鏡一面文三喬遊印一顆康熙帝の画一幅鑑定を乞ける時」「稲垣如蘭公のもとへ古物あまた見せまいらせければ(ば)日を卜して蘭山をはし(じ)めあまたの本草家博学者など(と)招き」などといった詞書きが随所に見受けられる。尚古・考証の流行があり、その上に考証隨筆の流行(これを決定的にしたのが、松平定信監修の『集古十種』ではなかったか)があった。「寸錦雜綴」もまた、そのような時代背景を体现していたのである。

このように、「寸錦雜綴」が中良の編ではないということになれば、それを示唆する幾つかの徴証も拾うことができる。その中で、何と言っても顕著なものは、ほかならぬ源内筆「漱石香報条」の付説が、

平賀先生作(割注、名国倫字士弊号鳩溪狂名風来山人亦天竺老人ト云)丑ハ明和六乙丑なり

とされていることである。この一条が不自然なのは、「天竺老人」とは中良の戲号であって、源内の戲号ではないということである。周知の通り、源内は「天竺浪人」と号した。寛政十年当時中良は

四十一歳。源内没して既に十九年目とはいえ、三年後(享和元年)には源内の戲号の中でも最も人口に膾炙した風来山人の二代目を襲名し、さらにそれから七年後には、やはりよく知られた堀内鬼外の二代目を襲うなど、源内への思慕は変わらぬ中良であつてみれば、右のような錯誤は一寸考えられない<sup>(生)</sup>。また、最終項目の「芭蕉翁米櫃」のみ、他の項すべてに見える付説を欠くが、「柏庭所持／五粒二伝へ今又三升二伝／壬辰六月下旬懇望シテ一見写之」という書き込みの「壬辰」は安永元年以外には考えられず、この年十七歳の中良の「写」では些か時期尚早の気味がある。また、その書き込みの筆跡(同筆の書き込みは「東都地図」にも見える)は断じて中良のものではない。もし編者とは別人が写したというのであれば、その旨注記があつてしかるべきであり、これを以て付説に代えたということなのだろうか、これはやはり編者の書き込みと考えてしかるべきである。また、出版差し止めに遭つた書(専ら蘭語習得者への寄与を優先した『類聚紅毛語訳』の例とは異なり、きわめて趣味的なものでもあつた)を強行出版する姿勢は、こと趣味の領域に関して、中良の行き方とは明らかに背馳するものもある。このように考え来れば、この点でもやはり編者が中良というのは不自然と思われる。

如上、本書はすべからず森島中良の著作一覧からは外すべきである。



#### 四

ところで、一度版行差し止めに遭ったこの書が、どのような経緯で出版され、版を重ねるようになったかという点について、考察する必要があるだろう。

実際に流布した『寸錦雜綴』には、大きく分けて二系統の本があることは周知の通りである。そのもっとも顕著な相違は、序文の署名が「森羅亭主人 印(正象)」となっているか、「風来亭主人 印(武蔵野人)」となっているかである。そして、前者の刷りのはやいことは、両本の版面の荒れや造本の具合、あるいは紙質を見れば一目瞭然である。中でも、後者の「風来亭主人」の署名のうち、前者と異なる「風来」の二文字は、序文中から集字「風」は二十四行目「風雅」より、「来」は三十九行目の「後來」よりし、入木したものであり(逆に言えば、「亭主人」の部分のみを残して、その前後を削り、入木したのである)、後者が前者より先行しない徴証となる。印(武蔵野人)。「むさしののひと」とよむべきだろう。もまた、中良の印としてもっとも著名な前者と比してこの他に彼が用いた例はなく、中良のものとは思えない。

いずれにせよ、当初(「森羅亭」版の時点)から、先にも述べた通り、版元・売捌等の書肆名はどこにも記されないものであり、この書が非営利出版であったことだけは確かである。つまり、差

し止めに遭ったことで、『類集撰要』に「仲ヶ間内」と記された書肆は手を引き、おそらくは少数数の配り本の形で刷り出されたものと考えられる。このような経緯は、『類集撰要』で『寸錦雜綴』に並べて記された、こちらは間違いなく中良の著書である『類聚紅毛語訳』とも共通する。しかし、仮に非営利出版であっても、行事に「了簡に及び難し」、さらには奉行に「御沙汰に及ばれ難し」との仰せを受けた書である。当初は、序文程度ならばと版行に異を唱えなかった中良であったと思われるが、それが、次には戯号の削除・改編(すなわち正体の隠蔽ということであろう)を求めたのは、おそらく「森羅亭」版に対して、再刷の「風来亭」版が、奥付は欠くものの営利を目的とした版行だったからではないか。

或いは、中良が享和元年に「風来山人」を名乗ったことによる改変ということも考えられないではないが、それにしても中良自身による署名ではなく(中良が自ら「風来亭主人」との戯号を名乗り記した例を見ない)、おそらくは、『寸錦雜綴』への関与自体の否定(すなわち序文の削除)を望んだ中良に対して、出版人がそれを承知せず、「森羅亭主人」を「風来亭主人」と改変することとで妥協したという辺りだったのではなかったかと思われる。そして、このことは、「森羅亭主人」版はもとより、「風来亭主人」版の版行もまた、中良存命中(文化七年以前)であることを示唆するであろう。今田氏の挙げられた『我衣』巻四(写本。文化五

年の条。先掲「森島中良の筆禍」による）に「寸錦雜綴の付録に、所蔵のものを上木せんと、唐本屋庄八来る。少々見へ書拔遺す」とあるのは、既に出版されている「寸錦雜綴」の「付録」として、「我衣」の筆者である加藤曳尾庵所蔵のものをを用いての版行の希望を書肆が伝えに来たと解すべきであろう。この時（文化五年）に「寸錦雜綴」が版行されたということは、以上見て来たところからも、考えられない。文化元年に成立した「仮名手本穿鑿抄」の粹川子の跋文にも「世界は忠臣蔵趣向は寸錦雜綴いかにも書たり見出したり」との一節が見えて、これ以前に「寸錦雜綴」が流布していたことは間違いないのである。実際、「寸錦雜綴」の出版に「唐本屋庄八」が何らかの関与をしていたのかも知れないが、よその版元が出版した書の付録や続編を他の書肆が何の断りもなく翻出することもまたこの時代には日常茶飯事であったから、ここでも単に評判のいい「寸錦雜綴」の二番煎じを狙ったというだけのことと解しておきたい。

つまり、当初から（あるいは、しばらく後のことであつたかも知れない。出版時期として、例えば享和三年の秋に成った手柄岡持（朋誠堂喜三）の随筆「後は昔物語」に「寸錦雜綴」の書名が見え、管見の限り、初刷の版行はこれ以前であつたことが知られるのみである）行事・奉行の指図に従わずに出版を強行したことは、おそらく功名心とも呼ぶべき、編者の意図によつたものと思われる。その結果、「寸錦雜綴」がかなりの評判を得たこと

は、先の「後は昔物語」や「穿鑿抄」あるいは「我衣」の記事が示しているだろう。

特に、「後は昔物語」では、喜三二の本文に対して山崎美成が「且寸錦雜綴にのするものは。おのれは疑ひなきにあらずなん」と頭注で反論し、さらに喜多村均庭も意見を述べており、それだけこの書がよく読まれていたことを窺わせる。また、同じ均庭は、「武江年表」の斎藤月岑記事（享和年間記事）「戯作者の随筆、京伝の作に並ぶものなし」に対して「寸錦雜綴」を挙げ、京伝の随筆は珍しくもなく誤りも多く「殊に不出来」と反論しているのであつた。

ともあれ、これらの書のいずれにも中良の名が現われないこともまた、「寸錦雜綴」の編者が中良ではないことを示唆するものの如くである。

## 五

以上、「寸錦雜綴」、特にその編著者に関して、些かの考察を試みた。繰り返すが、この書が森島中良の著作ではないことのみは、ほぼ明らかになつたと考える。

寛政の改革直後の蘭正と放恣の微妙な均衡の上に、この書の成立と差し止めがあり、結局出版に至つた事実は、それが編者の編集意図の外にあり、あるいは本書が語るもつとも大きなメッセジであるかもしれない。

## 注

- 1 日本随筆大成の解題等。以下に見るように、実は成立は谷風没の直後であったということになる。
- 2 引用は、高木元氏の翻刻(『讀本研究』2、昭和63年6月)による。
- 3 例えば、「三十二寸」と記す「芭蕉翁米牋」の圖版は実際には約67センチ(二十二寸)で載る。
- 4 例えば、日本随筆大成旧版の解題。
- 5 「寸錦雜綴」の「緑青人」が中良の別号であったという考え方は、『狂歌あきののら』の出版文化十年には中良は既に没しているという事実(文化七年十二月四日没。式亭三馬作「田舎芝居忠臣蔵」序及び、竹垣柳塘宛大田南畝書簡による)から、ほぼ成立不可能ということになる。
- 6 解題によれば、稿本の段階にとどまる「遺稿抄」において、狂歌・発句の欠落は珍しいことではなかった。翻刻にも、二十六に上る一行分の空白はそのまま残されている。
- 7 他にも「寸錦雜綴」の編者は付説で細井広沢を「広沢先生」と呼んでいるが、広沢は近世前・中期の書家(万治元年(一六五八)生、享和二十年(一七三五)没)。宝暦四年(一七五四)乃至六年生まれの中良であれば直接の師事はありえない(伝来する細井家への配慮であらう)。そうであれば、「平賀先生」もまた、これを必ずしも師弟関係と解釈する必要はない。加えるに、中良が源内を呼ぶ場合、「平賀先生」ではなく「風来先生」と呼ぶことが多かった。
- 8 中良および桂川家の事跡については、今泉源吉氏「蘭学の家桂川の人々」(『榊書林』、昭和40・43・44年)に詳しい。
- 9 「日本古典文学大系」等参照。随筆大成新版解題が「再刊に当り……

一部印刷を改めた。」というのは、再刷の「風来亭主人」の序を「森羅亭主人」のものに改めたということなのである。

10 尚、「森羅亭」版と「風来亭」版には、序文署名のほかに「谷風手印」図中の「〇〇/十寸」を再版で欠くという僅かな異動がある(初版は国会図書館本、再版は達磨屋吾一等旧蔵架蔵本により、それぞれ数本を以て対校した)。その他、随筆大成の影印は、①「揚屋請帖」という見出しを欠く、②「娼妓面粧」奥付の「清信画」の「画」の点を欠き「図」と見える、③「玉菊追善衣手冊子」の「雨」の点を欠き「かし」と見える、④「芭蕉翁米牋」図中の「三十二寸」を欠く等の不備があり注意を要する。

〈付記〉相見香雨稿「酒井伸遺稿抄」を御教示下さった高木元氏に深謝致します。

〈追記〉式亭三馬作の合巻「大尽舞花街始」(文化七年刊)に、「二枚五両の小脇差寸錦雜綴に図あり」と見える。中良に私淑し、その許に出入りした(文化元年刊「狂言綺語」序)三馬が、中良存命中に記した右の一条に、中良の名を挙げないことは、「寸錦雜綴」非中良作説の大きな傍証となる。

また、狂歌師縁青人の名は、咄本「詞葉の花」(寛政九年刊)、『無事志有意』(同十年刊)や、狂歌集『美満寿組入』(同九年刊)にも見えることを付言しておく。

(いしがみさとし／新見女子短期大学講師)